

植 調

第 1 卷
第 3 号

昭和 42 年
7 月 発行

財団法人 日本植物調節剤研究協会編

目 次

畑作改善とケミカル・コントロール (農林省農事試験場 畑作部長 農学博士 長谷川新一)	1
農薬の残留毒性(1) (農林省農薬検査所 化学課長 柏 司)	5
除草剤の今後の方向(3) (農林省農事試験場 農学博士 荒井正雄)	8
「アジア・太平洋地域雑草防除技術交換会議」 (農林省九州農業試験場 農学博士 野田健児)	11
およびハワイの農業と雑草防除について (1)	
昭和41年度園芸関係除草剤試験成績概要	17
新除草・調節剤	27
植調協会だより	31

干天・酷暑と植物調節剤の作用

財団法人 日本植物調節剤研究協会会長 河 田 党

6月20日前後の新聞によれば、6月に入ってから雨量は、九州で平年の3%、横浜で16%という大干魃で、暑さも甚しく、今夏はさらに炎暑が続くだろうという。そして、キョウチクトウが既に花を開き、平年よりも1ヵ月も早く、秋の七草であるハギやオミナヘシも咲き出し、この異常な天候で、植物のリズムも狂ったのだろうと書いてある。正にこのような異常環境によって、植物の生理も平常の状態とはかなり変わってくるだろうと想像される。そうすれば生育調節剤や除草剤の作物や雑草に対する影響も、平年の状態とは異

って来ないとはいえない。我々のこういった植物調節剤の試験は、努めて全国の色々な土性や気象の所で行ない、その結果を総合して結論は出しているとはいえるものの、そう甚しい異常環境での試験を行なおうとしても、これは出来ない。幸か不幸か、本年の異常天候に遭遇したことは、異常環境での試験を可能ならしめたともいえるだろう。こういった減少にない条件下での試験成績を固めて置くことは、植物調節剤将来への利用のため又となないデータとなるに違いない。記して炎天下に試験を担当される各位の労をねぎらい度い。